

「風土記篇」(4) 石狩

俳句と生きる

石川美智子

一月のある日。石狩川河口での日の出を目指す。冬期は雪堆積場となる海水浴場の駐車場に車を置き波打際に出る。凍てついた浜を日本海の波音を聞きながら一步一歩進む。気温マイナス15度。帽子からはみでた髪が凍りつく。ほのかに夜が明けてくると波の輪郭も見え始める。この海にいつの日から魅せられている。歩く事四十分、辺りが明るくなる。浜崖に登る。朝焼けである。期待を胸に河口まで歩く。石狩川が滔々と海に注ぐ。河口はいつも違う表情を見せており。持参のコーヒーも出せないくらい寒い。冷たい。が、朝陽の素晴らしい景色はなものにも代えがたい。

石狩市は札幌市の北隣に位置し、石狩河口と石狩湾に沿つて広がる人口六万人足らずの町である。江戸時代初期松前藩により場所(アイヌとの交易所)が開設された。歴史上「いしかり」の地名が最初にあらわれるのは寛永十二年の松前藩地図である。元禄七年、鮭の豊漁を祈願して石狩弁天社が創建された。弁天社にはチョウザメに由来する石狩固有の神様「鮫様」も祀られている。河口にひさしを並べる数

ら句会での短冊・色紙・書幅でもあつたようだ。

「石狩尚古社」の一員に柳蛙がいる。柳蛙とは当時石狩に伊藤房次郎という仮名で潜伏していた井上伝蔵の俳号である。ここで少し井上伝蔵に触れておこう。

明治十七年、生糸価格は大暴落を招いていた。埼玉県秩父郡では逼迫した農民が決起。高利貸しや警察署を襲った。秩父事件である。伝蔵は中心人物の一人であった。事件は三日間で鎮圧されたが、逃れた伝蔵はその後欠席裁判により死刑を宣告された。妻子を残し一年間の土蔵の生活を経て石狩の地に降り立つ。

代書業や小間物屋をし、新たな妻との間に六人の子を育てている。当時、鮭漁に沸いた石狩には潜入者の身を質する空気が稀薄だったのだろうか。違和感なく受け入れられ俳句にも熱心に通っている。

「俳句の会に行くといろんな料理が出るらしく、お土産もあつた。大きな商店でやっていたのでしよう」とのちに三女が語っている。その商店こそ句会場になっていた中島商店であった。明治四十四年、石狩を出ている。時の盛衰と自身の生活は微妙に、かつ深刻に絡みあうものである。札幌の一年を経て当時ハツカ景気に沸く野付牛(現在の北見市)に移住した。伝蔵は大正七年六十四歳でその生涯を終える。死を意識した床で妻や子に自分の身分を明かし、友人である新聞記者にも秩父事件の井上であることを告げた。二十数年間の石狩での生活は幸せだったのではないか。しかし秩父に置いてきた妻と一女のことで事件で命を落と

十三場所というから盛況ぶりが伺える。

その賑わいの中で生まれたのが安政二年結成の俳句社「石狩尚古社」である。おそらく道内ではもつとも古い俳句結社のひとつ。現在その名を受け継ぐ尚古社を是非訪ねて頂きたい。平成元年に開館された私設資料館で、館主の中島勝久(「石狩尚古社」二代目社主兼田池斐曾孫)が懇やかに迎えてくれる。

明治時代からの呉服商中島商店の石蔵に埋もれていた「石狩尚古社」の俳句の短冊・色紙や秩父事件で死刑宣告を受けた井上伝蔵の関連資料などが所狭しと陳列されている。石狩場所の役人、商人、漁師などが仕事の合間に俳句をしながら、松前や函館をはじめ全国の俳人と交流していた様子がこれらの資料から浮かび上がってくる。俳句が働く者の生きがいであったことのあらわれであろう。

「石狩尚古社」の中心的存在であったのが二代目社主兼田池斐である。中島商店番頭からちに中島家を支えて来た人物である。京都、大阪方面に呉服の買い付けに廻り、各地の句会に参加していた。中島家の所蔵品の多くはそれ

した同志のことは生涯忘れることがなかつたと想像できる。弁天歴史公園には次の句碑が立つ。

俳の眼にちらつくやまと祭

柳蛙

事件後、百有余年を経た現在でも秩父事件の研究者は多く資料館尚古社を訪ねている。

「石狩尚古社」の俳句活動は活況を呈し明治三十五年には「尚古集」が発刊された。全国からの三五三八句を掲載。投句者は道内外にわたり、道央俳壇の拠点だったことがわかる。以後活動は道内の俳壇と交流することが主となつていった。正岡子規が提唱する新しい俳句運動が全国的に盛り上がりから新傾向の俳人たちとも交流した。大正末期になると活動も下火になる。「石狩尚古社」を物心両面にわたり支えてきた兼田池斐が亡くなり、活動が衰



砂丘に立つ石狩灯台

退し自然消滅していった。

石狩市では「俳句のまちーいしかしり」俳句コンテストが毎年行われている。大人の部で十四回、小中学生対象のこどもの部で十三回の歴史をもつ。昨年の応募は大人の部二六四句、こどもの部三〇五四句という。確実に定着している行事である。毎年兼題が出される。「天位」の作品は旧石狩町役場の梁を利用しての木碑に大書され弁天歴史公園に建立される。

ここにいう弁天歴史公園が整備されたのが平成十二年。公園のなかには井上伝蔵の他に有馬明人・高浜年尾・嶋田一歩・嶋田麿耶子の句碑がある。やわらかい芝生を踏みながら一つひとつ眺めて歩くのはよいものである。この公園の中に「樂山居」という建物がある。かつて石狩医院の離れとして建てられ現在では石狩唯一の書院造りの建物である。水琴窟を備えた枯山水の庭園を縁側から眺めていると往時の声が聞こえるような気がする。院長の鈴木信三は「石狩尚古社」二代目社主だったこともあり茶会、句会などに使われてきた。昭和六十三年廃業したが、もとの造りのままに復元され活用されている。平成十三年私の所属する俳句結社・水原帶の夏季大会が石狩市で行われ、この「樂山居」を句会場にした。

水原帶創成期の山田綠光らの句碑が道の駅「あいろど厚田」の句碑の森にある。道の駅の後方のゆるやかな坂道の両側に多くの句碑が立つ。

マーケット。灯台は岬・島・港口などに設置された航路標識であり、航海の安全を示すために陸の突端にあるのが普通である。が、石狩灯台はそれとやや異なる。もともとは石狩川と日本海がぶつかる河口先端に建設された灯台だったのだが、石狩川が運ぶ土砂により砂嘴が伸び河口は元の場所から直線距離で約一・五キロも離れたのである。大きく伸びた広大な砂丘は海浜植物保護地区となっている。整備された木道を歩くと乾いた砂丘草原に育つ代表的な海浜植物を楽しむことが出来る。さらに進むと湿性の植物が見られる。先端では石狩川と石狩湾(日本海)の邂逅にも合える。時に優しく時に激しくぶつかる表情を流木に腰かけて眺める。贅沢な時間である。

一昨年「俳句のまちーいしかしり」の天位の作品を紹介する。

砂嘴統ぶる石狩灯台雲の峰

樋口 博

私が石狩に転居したのは昭和五十三年。「花畔」(ばんなぐろ)というアイヌ語由来の地名に魅かれた。字名が改まり「花畔」という美しい名前が徐々に消えて何かしら焦りもあつた。その頃、一代目主宰川端麟太に誘われ水原帶に入社。現在に至っている。石狩に住んで四十年。俳句を始めて四十年になる。石狩が育んできた俳句の歴史の中にいつしか包み込まれてきたのもかもしれない。

すこし燃える体内沖の花あかり
雪山かゝんと晴れたり鶴は駄派

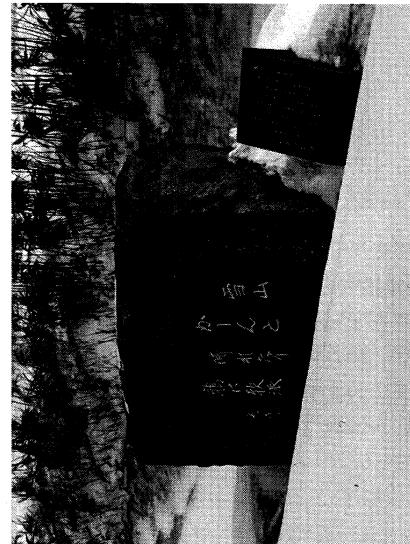
山田綠光
鈴木光彦

これらの句碑の前に立つとなぜか自然に背筋が伸びる。句碑の頭にそっと手を触れ帰ってくる。

水原帶三代目主宰鈴木光彦の句碑建立の日が今も思い出される。平成十九年七月七日、私には初めての句碑建立行事であった。厚田神社宮司により神事の儀に入る。が、坂なので句碑の前の供物台がいかにも不安定である。宮司夫人人と私が左右の脚を支え続けた。今も忘れられない。句碑は石狩湾を一望できる風光明媚な位置に建つ。

現在、石狩では懇吟社・石の花俳句会・はまぼうふう・石狩文芸同好会・石狩かしわ俳句会などが作句活動を続けていている。

石狩市といえば赤白横縞模様の石狩灯台がランドド



鈴木光彦の句碑

現代俳句年鑑

現代俳句 現代俳句年鑑

2020

現代俳句年鑑

新時代へ！

ご参加の締切は5月31日です。

『現代俳句』各号に応募作品中の秀句が再掲載されます。奮って参加下さい。

●作品数：一人5句。所定の応募用紙をお使いください。楷書で丁寧に
お書きください。
●参加費：3000円（送料込み）

現代俳句協会年鑑部 電話 03-3839-8190
FAX 03-3839-8191
〒101-0021 東京都千代田区外神田6-5-4 偕楽ビル7F
[現代俳句協会ホームページアドレス](http://www.gendaihaiku.gr.jp/index.shtml) <http://www.gendaihaiku.gr.jp/index.shtml>